

審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

物心二元論的世界観が批判されて久しいにも関わらず、あいかわらず「身体」を「物質」とのみ捉え、「理性」の対極の「もの言わぬ身体」として、「学習」理論、「コミュニケーション」理論の対象外とするか、逆にそれを逆手にとって、特権的な身体実践理論（「阿吽の呼吸」「以心伝心」「師匠論」等）が跋扈する教育論の現状に対し、本研究は、近代教育学の構図に遡って、改めてそうした近代哲学的な認識論的枠組み自体を問い直し、哲学的身体論の側面から教育学を検討し直した、その教育哲学における意義は小さくないといえることができる。

哲学研究史上も進んでいない身体論研究を、唯一の本格的な研究であるメルロ＝ポンティ現象学に学び直し、先行研究の問題（メルロ＝ポンティ思想展開に対する「定説」の問題）を批判しながら、独自にテキストから読み直してみせた点は、哲学研究としてもオリジナルであり、それに連動して、メルロ＝ポンティがパリ大学文学部ソルボンヌで行った教育学と児童心理学の講義を等閑視してきた不備を批判し、その思想的意義を、現象学の根幹に遡って分析し直した研究は、これまでにないものである。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

序論で教育哲学におけるメルロ＝ポンティ身体論研究の現状と問題を俯瞰し、それが哲学研究におけるメルロ＝ポンティ研究の不備に淵源するものであることを究明したうえで、本研究は、メルロ＝ポンティ哲学研究の問題と、教育哲学がメルロ＝ポンティ「ソルボンヌ講義」を等閑視してきた問題を、メルロ＝ポンティ自身のテキストの読み直しから再検討する手法を取り、これまでその問題の困難さゆえ正規に取り組みされてこなかった主題に挑んだ。

まずは、『知覚の現象学』（1945）「序文」の検討により（第一章）、メルロ＝ポンティが、『行動の構造』（1942）で解明した当時最新のゲシュタルト心理学の知見を基に（第二章）、「知覚」の「発生的現象学」的分析の必要を提起し、近代哲学の出発点とされたデカルト的コギト（「我惟う、故に我在り」の「惟う我」）から出発する全近代哲学、全科学（カント・ヘルバルトに始まる近代教育学を含む）、および従来のフッサール・ハイデガー現象学に対する革新の試みとして展開されていることを究明してみせた。それを基に本研究は、哲学、現象学、心理学、科学、教育学に渡って先行研究を「発生現象学」的手法によって批判的に考察し直してみせる（第三～五章）。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

哲学的身体論自体が、その困難さゆえメルロ＝ポンティ以降途絶え、加えて教育哲学における身体論が近代科学的図式上のものでしかない中で、本研究は、限られた研究資料を徹底して批判的に考察し直し、メルロ＝ポンティ原典の読解を徹底して深めてゆくことを中心としている。

ゲシュタルト心理学の意義の哲学的解明によりメルロ＝ポンティは、「知覚」が理性的主体による構成・意味づけ以前に既に「統一的意味」を持つこと、それが非因果論的・構造的に関係

づけられていることを明らかにして、具体的にはそれを、「錯視」「幻影肢」「シュナイダー症例（大脳欠損による高次機能障害）」を題材に、従来の一対一対応図式的因果論的説明（「恒常性仮説」）では説明できないことを解明してみせ、そこから逆に、「発生的現象学」が解明して見せる、コギト形成以前の「知覚」の真理がありうること、それらの一定の「恒常性」をもとに、不変的な科学的真理、普遍的な時間空間図式、存在観、運動観、及びその主体である自己同一の論理的なコギトの概念が構築されたものでしかないこと、を解明して見せているが、本研究は、従来の研究・訳書の不備を徹底的に検証し直して、メルロ＝ポンティの主張を再構成してみせている。

（４）研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

以上のメルロ＝ポンティ『行動の構造』『知覚の現象学』の読み直しから、従来の近代哲学・近代科学（近代教育学）における、理性主体・コギトを出発点とする世界観の一面性に対するメルロ＝ポンティの批判を踏まえ本研究は、これまで教育哲学が取り挙げずに来た「ソルボンヌ講義」「大人から見た子ども」「幼児の対人関係」の検討を行う（第六章、結論）。そこから、理性的主体（「図」）相互によるコミュニケーション論が全く一面的なものでしかなく、物理的身体概念も科学的世界観を出ないもので、実際の教育は、「大人」からは連続的に捉えられ得ない「こども」の「知覚」において、「大人」の「図・地（自分にも「不透明」なライフストーリーや言語文化・歴史、精神分析学的コンプレックス等を含む）」から「こども」は「学ぶ」（自分のものとしてそれを学び直す自由を持つ）とメルロ＝ポンティが捉えていることを解明して見せた。

（５）取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

近代教育学における「こども」観の実質的不在が近代哲学的なコギト観・理性主体観に原因するものであることを批判的に解明し、教室における「大人と子ども」の関係を、近代教育学的な「理性」相互のコミュニケーションとしてではなく、「理性（「意識」における「図」）だけでなく「意識」における「地」（「身体」を含む）も含めた相互関係性図式として解明して見せた本研究の教育哲学・教育学に対する意義は十分なものがあると考えられる。加えて、理性主体の裏返しでしかない物質的身体・「もの言わぬ身体」を逆手にとって「共存在」性を主張する従来の身体論的教育論的身体論——しばしばそれは「日本的身体論」とも結び付けられる——の哲学的短見を、メルロ＝ポンティによる「身体」概念の更新（「図・地」関係における「地」としての身体）を通じ十分に立証した意義は、その「地」の内に「不透明なもの」を含みつつ成立している教室空間全体の解明の必要の主張と併せて、今後の教室空間研究、人間関係研究、身体論研究に一石を投ずるものとして、十分に取得学位にふさわしいものと、評価できよう。